発達理論の学び舎

Back Number: Vol 119

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

2361. 作曲に潜む揺らめく一本の線：天球の音楽

2362. 今日の活動に向けて

2363. 大切なライフワーク

2364. 協働的ライフワークと時間について

2365. 存在が曲になる日に向かって

2366. 曲の構造的パターンの習得に向けて

2367. 小鳥たちの大合唱と夢

2368. 今日の取り組み

2369. バッハの優れた演奏者と作曲の新たな習慣に向けて

2370. 作曲技術の発達プロセスに関する研究案

2371. ツショル教授との研究ミーティングより

2372. 雷の落ちる夜に

2373. インターンの最終ミーティング

2374. 音を楽しむこと

2375. 博士課程での研究に向けて

2376. 研究の軌道修正

2377. 二つの印象的な夢

2378. 研究と自己に伴う揺れ

2379. 春の入り口から

2380. 感動と内面の成熟

© YOHEI KATO 2018

2361. 作曲に潜む揺らめく一本の線：天球の音楽

一日の仕事を終え、そろそろ一日の楽しみである作曲実践に取り掛かりたいと思っていた矢先、どうも構成的な意識にいる自分に気づく。「カチッ・カチッ」と思考空間の中で音が聞こえてくるかのようだ。それは、内側の中で何かが形になろうとするときに発せられる無音の有音である。今この瞬間に、おそらく自分の中で何かを言葉として形にしたいのだと思う。

そうした衝動に蓋をする形で作曲実践に取り組もうと思ったのだが、やはり形にするべきものを言葉として形にしておこうと思った。とはいえ、何を形にするべきかが全くもって明確ではない。その様子はどこか、作曲において最初の一つの音符を置く時の感覚と似ている。作曲において、最初の一音はいつも未知であり、その一音から全てが始まる。

そして不思議なことに、最初の一音から派生する音は無数にあるはずなのだが、それが終わりの地点まで一本の揺らめく線で最初から繋がっているかのような感覚がする時がある。私はまだ作曲を学び始めて数ヶ月であるため、始点の作り方、終点の作り方、そして始点から終点に向けたプロセスの構築について分からないことだらけである。しかし、これまでの作曲経験を振り返ってみると、どこか上記のような体験をする時があるのは事実だ。最初の一手を打った時、その一手は一つの音符という形を伴って有音となる。

その音以降は基本的にまだ形になっていないから無音と考えられるが、実際にはもうそこに音があるのだ。だからそれはもう無音かつ有音なのだ。作曲プロセスというのは、どこか決定論的カオスの様相を帯びているのかもしれない。最初の一手からランダムに音が生み出されていくのではなく、間違いなく非線形的なプロセスを経ながら音が生み出されていくのだが、そこには規則性という一本の揺らめく線がある。

「あぁ、自分が心眼で見ていた線はそれか」と思った。作曲に潜む隠れた側面が徐々に浮かび上がってくるにつれ、過去の偉大な作曲家のみならず、作曲という行為そのものの奥深さに畏怖の念を持つ。音を作曲という営みとして最初に生み出した人間に対する感謝の念が尽きない。おそらく、人類の歴史を遡ってみれば、原始人でも音を楽しむことができたのかもしれない。

© YOHEI KATO 2018

しかし、それを作曲という営みまで高めたのは文明が生まれた時期の人間たちだろう。音楽史については全く知識がないので何とも言えないが、作曲という行為を生み出したのは古代エジプトや古代ギリシヤの人たちだろうか。以前にライデンの博物館を訪れた際にはそのあたりの問題意識が薄かったため、もしかしたら音楽に関する資料を見落としていた可能性がある。

随分と前に読んだ音楽理論の中に、古代ギリシャのピタゴラスが「天球の音楽」を探究していたことを知った。やはりこのあたりの時代に作曲という営みが生まれたのかもしれない。ピタゴラス、およびプラトンを含めた古代ギリシャの思想家の音楽理論についてまた学びを深めていこうと思う。

依然として構成的な意識、つまり内的感覚を一つの形としてまとめ上げ、それを言葉や曲として創造していこうとする意識が続いている。就寝まで後二時間弱あるため、ここから十分に作曲実践に取り組むことができる。フローニンゲン：2018/4/2（月）20:09

No.936: The Third Day at Warsaw

The third day to stay at Warsaw began. It is fine weather today, too. I can see the beautiful sunshine up in the sky. The life history of Chopin that I learned yesterday at the Fryderyk Chopin Museum inspired my inner senses. I convince myself that today is also a meaningful and precious day to deepen my life and enrich the quality of my life. Warsaw, 08:25, Sunday, 4/15/2018

2362. 今日の活動に向けて

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎた頃に一日の活動を開始させた。起床直後、小鳥の鳴き声が辺りに響き渡っていた。それは澄み渡る鳴き声であり、どこまでも遠くへ辿り着けるような透き通った音の結晶だった。

今朝起きてみると、書斎の窓ガラスに雨滴が付着しており、つい先ほどまで雨が降っていたのだと知る。今は雨が止んでいるが、どうやら午後からまた雨が降るらしい。昨日は天気予報通りにはならなかったので、今日の天気もどうなるかはまだ分からない。今日は最高気温が16度であり、早朝のこの瞬間の気温も九度と極めて高い。だが、なぜだか寒く感じられたので、結局いつもの通り暖房

をつけている。暖房をつけ始めたのは昨年の11月頃からだと思うので、随分と長く暖房にはお世話になっていることが分かる。暖房を使わなくなるまでもう暫く時間がかかりそうだ。

今日は午前中に一件ほど協働プロジェクトに関する仕事がある。形式上、本件は今日の仕事で最後となり、来季も継続してこのプロジェクトに参画させていただくことになっているが、それが開始されるのは六月末か七月の初旬である。今日の仕事をもってして、一旦の区切りとなる。そのため、今月末に中欧から帰ってきたら、プロジェクトの結果に関する報告レポートを作成し、協働者の方に提出しようと思う。その報告ミーティングは五月上旬をめどにしている。

諸々の事柄が日々静かに進行していき、それは堆積を伴う形で一つの形になっていく。おそらくこれがライフワークに従事するということであり、一人の人間がこの世界に関与しながら生きていくことの本質にあるような気がする。とにかく全ての事柄を緩やかに着実に進めていくこと。形を創造しながら少しずつ進んでいくことが何よりも大事である。

早朝の六時半前であるためか、辺りは相変わらず真っ暗に包まれている。そうした中、目の前の通りを走る車が水しぶきを上げる音が聞こえて来る。どうやらまた雨が降り出したようだ。天気予報は早速外れ、もうこの時間帯からうっすらとした雨が降り始めている。今日は午前中の協働プロジェクトに関連する仕事が終われば、あとは全て自分の時間となる。

今日からはまた本腰を入れて、「デジタルラーニングと学習環境」のコースの最終試験に向けた学習を始める。欧米で経験する三回目の修士課程もいよいよ佳境に入り、このコースが履修する最後のものとなる。文字通りの最終試験に向けて抜かりない学習を行いたいと思う。今日からは、全てのクラスの講義資料を読み返し、全体を通じて繰り返し二度ほど読む。すなわち、初回から最終回のクラスまでの講義資料を読み返したら、再び初回のクラスの講義資料に戻るということだ。

こうすることによって、記憶の定着を図ることができるだろう。講義資料を繰り返し読む中で、課題論文の重要事項をまとめたワードファイルに随時重要な情報を書き足していく。読むことと書くことをここでも並行させていく。講義資料を二度ほど繰り返し読むことができたら、今度はサンプル問題に取り組む。

このサンプル問題についてもすでにどのような雰囲気なのかを掴んでいるのだが、まだ具体的な回答を自分で行っていない。そのため、講義資料を二度読み返すことができたら、サンプル問題に全て回答しようと思う。問題も回答も全て、文献を読み進める際に重要事項を記載したワードファイルの中にまとめていく。サンプル問題への回答が終われば、再び課題文献を読み返すことにしたい。

ひとたびサンプル問題まで回答ができれば精神的なゆとりもあるだろうから、そこから再度文献を読み返す際には、あまり試験のことを気にせず、自分の関心に沿うような細かな論点にも目を通したい。実際に課題論文のいくつかは非常に興味深い論点を盛り込んでいるのだが、それが試験範囲ではなかったりする。そうしたこともあり、サンプル問題の回答後の文献レビューでは、細かな点も含めてゆっくりと課題論文を読み返したい。

空がダークブルーの色味を帯び始め、一日の活動の開始を伝えている。フローニンゲン:2018/4/3(火)06:40

No.937: A Feather of Spring

This is the fourth day to stay at Warsaw. Genial spring weather is embracing this city.Although it is a little bit cloudy today, I can feel as if I had a feather of spring inside of myself. Warsaw, 08:11, Monday, 4/16/2018

2363. 大切なライフワーク

昨夜の就寝前にいくつかの事柄に対して新たな気づきが生まれた。一つはライフワークに関する事柄である。自分のライフワークを大別すると、二つのものに分けられることにふと気づいた。一つは自分一人で粛々と進めていくものである。これはまさに、日記と作曲がそれに該当する。日々を生きる中で絶えず日記を執筆し、絶えず曲を作るということ。これは自分のライフワークの根幹を成すものであり、それは基本的には一人で進めていくことができる。

厳密には、日々の生活の中に他者との交流があり、この世界との触れ合いがあるのであるから、一人で成し遂げられる産物ではないと言えるかもしれない。だが、行為者は私一人であるため、とりあえずの分類上は自分一人で進められるものに括られる。欧州での一年目の生活を送っている際に、日記を執筆することが自分のライフワークであることに気づかされ、欧州での二年目の生活の際に

作曲をすることも自分のライフワークであることに気づかされた。これは自分から「気づいた」のではなく、「気づかされた」と表現した方が正しいだろう。何かが私にそっと告げたのだ。それ以降、日記と作曲は私の日々に不可欠なものとなり、それらは自分のライフワークとなった。

米国で生活をしていたあの四年間の中に、こうした形を伴った創作行為をライフワークとするような目覚めを経験しなかった。だが間違いなく、米国でのあの生活があったからこそ、欧州で目覚めを経験したのだと思う。内なるダイモーンが完全に目覚め、それが自分と同一化する形で自己を創造に導いていく。日記と作曲は、一人称的な営みとしてとにかく今後一生継続させていきたいと強く思う。

もしかすると、それはもはや強く思う必要などないのかもしれない。自分がそれをよく分かっている。私が願っているのは、死後の世界においても日記と作曲に取り組めるかどうかなのかもしれない。一生涯をかけて日記や作曲に取り組むというのは、もはや強調する必要など一切ない。なぜならそれをするのだから。実際にそれを最後の日まで行い続けるからである。

一方、私が真に願っているのは、最後の日以降においても日記や作曲に取り組めるかどうかということだ。ここでまた一つの大きな気づきに至る。今後日記や作曲を最後の日まで続けた瞬間、それは一人称的な実践を超越する。必ずそうなる。つまり、人生をかけて自分一人で継続させていたはずの日記と作曲が、私という一人の人間から離れることによって、他者がその創造行為を引き継いでくれるのではないかということだ。

昨夜、入浴中に奇妙なことを考えていた。「なぜ自分が演奏記号を入れているのだろうか？演奏者自身にその曲を再創造してもらうことが大切なのではないか？」という気づきが降りてきたのである。作曲をするときに、おそらくこれは作曲者の一つの役割なのだと思うが、演奏記号を入れ、演奏者が演奏しやすいようにする必要がある。しかし、私は作曲の素人であるし、音楽の世界の人間ではないため、この慣行がどこか悪しきものに思え始めていたのである。

「いや、演奏者は機械ではないし、作曲者に媚びへつらう追従者でもないのではないか。演奏者も創造者であるはずなのではないか？」と思うようになっていたのである。今はまだ形式的に演奏記号をこちらで入れているが、私はいつか「CBY (Create By Yourself)」という演奏記号のみが冒頭に

あるだけでいいのではないかと思うようになっている。速度の表示もない。あるのはただCBYという記号だけである。演奏者が真に感じる創造の喜びというのは、作曲家の音楽世界を忠実に再表現することではないなずである。

作曲者が作った作品を媒介に、自ら音を創造していくことが演奏者に真に求められることであり、それを可能にするのが創造的な真の演奏者だと言えるのではないだろうか。何一つとして楽器を演奏できない私が言うことではないのかもしれないが、これは演奏者のみならず、ありとあらゆる領域の実践者にも当てはまることだと思う。なぜ自ら創造しないのか。自ら創造するような支援を行いたいと願う自分がいる。その取り組みはもうすでに小さく始まっている。

日記や作曲というものが究極的に一人称的な営みではなく、二人称的な営み、つまり“I”の実践から“We”の実践に変容を遂げうるという気づきは非常に大きな意味を持っていた。日々のこの一連の個人的な日記の執筆と作曲実践が、自己から解放され、完全に他者に開かれるその日まで、私は文章を書き続け、曲を作り続けたいと思う。フローニンゲン：2018/4/3（火）07:07

No.938: The Fourth Day at Warsaw

The fourth day to stay at Warsaw is now ending. I visited the POLIN Museum of the History of Polish Jews today, which provided me with ample and profound understanding of the history of this country. Unfortunately, I'm still digesting the experience in the museum, but I can insist without doubt that the experience continues to deepen the quality of my life.I came across one philosophical book in the gift shop in the museum and four philosophical books in a local book store. Though my present academic work focuses on science, my main interest always resides in philosophy. Warsaw let me notice it. Warsaw, 19:30, Monday, 4/16/2018

2364. 協働的ライフワークと時間について

ライフワークの分類について書き始めたはずが、結局分類上の一つ目の項目である一人称的な実践、つまり日記の執筆と作曲について言及しただけで終わっていたことに気づいた。もう一つの項目についても書き留めておく必要がある。もう一つのライフワークは、間違いなく他者との協働で何かを創造していくことである。それは今のところ、協働プロジェクトという形で進んでいる。

こうした協働プロジェクトの意義は計り知れない。もはや説明する必要のないぐらいに、協働プロジェクトというのは一人では決して生み出せないものをこの世界に生み出していく。そこにまず大きな価値と意義があるように思う。とりわけ欧州に来てから協働プロジェクトの数が増えることによって、協働プロジェクトを通じた気づきと発見が蓄積されている。協働プロジェクトというのは、他者共に創造と成長に伴う喜びを共有する実践行為であり、そこで生み出されたものがこの社会への大きな関与につながっていくことを本質にしているように思う。

先ほど書き留めた日記や作曲という行為が、一人の人間を通じて創造と成長の喜びをもたらすものとは対照的に、協働プロジェクトではそれを実現させる数多くの人たちの関与が存在しており、彼らとそうした喜びを共有することのできる営みなのだと思う。日記や作曲と同様に、これからも多様な協働プロジェクトに参画し、ゆっくりとでいいのでそれらを前に進めていきたいと思う。協働プロジェクトへの絶え間ざる参画もまた私のライフワークの大切な一つだ。

ライフワークについて日記を書き留めていると、少しばかり時間が経つのを忘れていた。顔を上げると、ダークブルーの空がライトブルーに変わっていた。そして、小雨が止み、外は明るさを現し始めていた。時間が経つのを忘れていた、と書いた瞬間に、起床時に考えていたことを思い出した。作曲における時間の取り扱いに関する問題である。

私たちの成長や発達という現象には時間という概念は切っても切り離すことができない。なぜなら、私たちの成長や発達は時間の中で生じるものであるからだ。これは非常にシンプルな論理でありながら、とても奥深い事柄であるように思う。成長や発達が時間の中に埋め込まれ、時間を通じて成し遂げられるということについては改めて考えてみる必要があるだろう。作曲に関する時間の取り扱いというのは、一つの曲もまさに人間の成長や発達と同様に時間の中で生まれることと関係している。

曲が時間に埋め込まれる形で具現化されることも再度深く考えてみるに値する事柄だと思う。時間のない曲は存在しない。必ず曲には時間が寄り添っているのである。もちろん、私の作曲技術が未熟だということもあるが、とにかく私は時間としては短い曲を作っていきたいと思っているし、実際に短い曲を作ろうと常に意識している。長くても一分半や二分が目処だろう。理想は、俳句のように極めて短い形式の中に曲を作っていくことである。

俳句は短い形式の中に深遠な表現宇宙を生み出すことを可能にする。俳句を詠む時間というのは非常に短いが、そこには確かに深遠な宇宙を表現することが可能なのである。こうした俳句の持つ時間的な短さとそこに具現化される深遠さに惹かれているのは、私が日本人だからかもしれない。とにかく今後も、作曲に伴う時間概念については考えを深めて行きたいと思っている。

仮にこの秋から米国の大学院に移ることになれば、そこでは哲学科の講義を聴講したいと思っていた。ハイデガーの“Being and Time”一冊だけを精読していく講義があり、それを聴講することを考えていた。「存在と時間」というのは、人間存在における成長や発達のみならず、曲という存在における発展過程を考察する上で非常に大切な観点のように思う。フローニンゲン：2018/4/3（火）07:27

No.939: To be a Traveling Scientist, Philosopher, and Composer

I thought that I would be a traveling scientist, philosopher, and composer in my near future. Traveling all over the world enriches my life, which also cultivates my scientific and philosophical thoughts. I wish I could compose music more freely and spontaneously. If it were accomplished, I could always compose music to capture any precious experience during my trip. Warsaw, 19:34, Monday, 4/16/2018

2365. 存在が曲になる日に向かって

昨夜作曲実践を終えて就寝しようと思っていた時、作曲実践を行う時間帯とその取り組み方に新たな工夫をしてみようと思った。今のところ私は大抵、夜の就寝前に作曲実践を行い、仮に日中に時間を見つけることができたら、その時間帯には作曲理論に関する専門書を読むようにしている。まずこの時間帯を逆にしてみる方が良いのではないかと思った。昨夜も感じていたのだが、どうも夜の就寝前は時として集中力が高まらない時があり、そうした時間帯に新たなものを創造していくというのはなかなか大変だと思っていた。

やはり何かを創造することに関しては、私にとっては午前中や夕方までの時間帯の方が望ましく、午前や午後に一つの曲を作るようにしていきたいと思う。では就寝前には何を行うかというと、確かにそこでは作曲理論に関する専門書を読み進めていきたいと思っているが、その際に工夫をしたいと思う。

昨日改めて気付いていたのは、作曲の技術を高めるためには、兎にも角にも数多くの優れた作品に触れることを通じて、曲の構造的パターンの認識を豊かにしていくことが大事だということだった。まさに将棋やチェスの名人が膨大な実践を通じて獲得していった豊穣なパターン認識と同様のものを、私は作曲という領域において獲得していきたいと思う。

そのためには、作曲理論の専門書の中に紹介されている無数の具体例とより真剣に向き合っていくことが大切だ。この点については以前にも言及していたように思うが、過去の偉大な作曲家が残した作品の断片からパターンを認識することについてはより意識的になり、しかもそれを単に意識するのではなく、毎日の習慣的な実践にまで高めていきたいと思う。その実践をまさに毎晩短くてもいいので行う。方法としては至ってシンプルであり、理論書の解説文言を読むことに集中するのではなく、作曲ソフト上に具体例を自らの手で再現し、それを五感を通じて繰り返し聴いていくという方法だ。

とにかく言語感覚的な認知能力を発揮するよりも先に、作曲ソフト上に自分の手で一つ一つ音符を並べ、それらを五感を通じて聴くということを通して身体感覚的に曲の構造的パターンを把握していくのである。身体感覚的に曲の構造的パターンを把握していくことの重要性は、私にとって極めて大きい。とにかく日記を書くように、呼吸をするように曲を生み出すことができるようになる境地に至るには、そうした身体感覚的なパターン認識が不可欠だ。自然に淀みなく曲を創造していくために、この実践は不可欠になるだろう。

今私が使っているMuseScoreという作曲ソフト上に、まずは書籍ごとの音楽シートを作る。とりあえず今の私の焦点は、転調、ハーモニー、フーガであるため、それぞれModulation_Max Reger、Harmony_Walter Piston、The Study of Fugue_Alfred Mannというように、書籍のタイトルと著者が付された音楽シートを作る。その音楽シート上にその書籍で取り上げられている具体例を再現していくのだ。解説文を読むよりもとにかくまずは自分の身体を通じて音を捉えようとすることが大事であり、その後は解説文ではなく、自らの感覚をもとに思考を進め、自分なりにその曲を分析・解釈するということを行う。

最後に余力があれば、少しだけ解説文に目を通すということをしていく。解説文を真剣に読むのはもっとずっと後になってからでいい。午前中か午後に作曲実践を行い、夜に曲の構造的パターン

認識の実践を行うということを今日から始めたい。これをこれから毎日数年間行い続ければ、数年後には少しずつ、日記を執筆するかのような、呼吸をするかのような形で曲を生み出すことができ始めているのではないかと期待する。

言葉を発するのと同じ次元で、文章を執筆するのと同じ次元で曲を作れるようになりたい。自己の存在が言葉となり、自己の存在が曲になるように、これから毎日上記の実践を続けていく。フローニンゲン：2018/4/3（火）08:01

No.940: Glowing Spring Wind of Warsaw

I'll leave Warsaw soon this morning. All the days to stay at Warsaw were fine weather. I'll never forget the glowing spring wind of Warsaw. Warsaw, 07:06, Tuesday, 4/17/2018

2366. 曲の構造的パターンの習得に向けて

天気予報が少し変わり、今日はまだ強い雨に見舞われていない。早朝に小雨が降ったが、それ以降は雨は降らず、今は太陽が顔を覗かせている。どうやら夕方から夜にかけては雨が降り出すようだ。フローニンゲンはまだ寒さが残っているが、少しずつ春の予感を感じさせてくれる。ちょうど来週末に中欧に行くことになっているが、その頃にはフローニンゲンも暖かくなってきているだろうと期待する。書斎の窓から見える道端には綺麗な花が咲き始めている。それは春の到来が間近であることをそっと伝えている。

今日は午前中に協働プロジェクトの仕事があり、そこからは「デジタルラーニングと学習環境」の講義資料を読み返していた。当然ながら、学んだ内容を一度で理解することはできず、一度で全てを記憶することもできない。そのため、午前中に行っていたように、繰り返し対象に触れるということが大事だ。その際に、最初は細部に囚われず、全体を把握するような読みを心がけ、二回目以降に徐々に細かな点に注意していくことが賢明だ。

学習対象に何度も触れる形で知識を上塗りしていく形で理解を深めていく。これは午後から夜に掛けてもまた行いたい。ここからは一旦休憩として作曲実践を行う。昼食後にも少しばかり作曲実践を行っていたが、また一つ新しい曲を作りたい。

早朝に書き留めていた通り、作曲実践は午前中か午後に行うようにするというのは、自分の生活リズムにも合致しており、何よりも創造を司る自分の身体と精神のリズムにも合致しているようだ。作曲実践を午前か午後に行うというは、本当に習慣にしていきたいと思う。これが習慣化されれば、日記の執筆と共に、日々の創造生活がより充実かつ豊かなものになっていくだろう。作曲実践を挟み、再び学術論文を読んだ後、就寝前にはまた作曲実践を行う。

ここでは新しい曲を作ろうとするのではなく、作曲理論を学ぶことに時間を充てる。より正確には、作曲理論に関する専門書の説明文を読むというよりも、その書籍で取り上げられている具体例を作曲ソフト上に再現し、五感を使いながら曲の構造的パターンを把握し、そうしたパターンを無数に獲得していくことを意図している。これは今からもう楽しみだという感情がこの瞬間に湧いており、やはり私は目には見えない規則性を捉えることが好きなのだと思う。作曲というのはまさに、音という抽象記号を扱うものであり、そこに規則性を見出し、規則性を生み出す形で一つの曲を作っていくことに他ならない。

今は、過去の偉大な作曲家によって創出された無数の規則性をできる限り多く自分の中に蓄積していく段階である。そうした実践そのものが喜びをもたらすというのは、私にとっても本当に喜ばしいことである。今夜から曲の構造パターンの習得に励んでいきたい。フローニンゲン：2018/4/3（火）14:12

No.941: Budapest March

The second day to stay at Budapest began. I'll visit the Franz Liszt Memorial Museum today. I realize that a march is flowing inside of myself. Budapest, 08:14, Wednesday, 4/18/2018

2367. 小鳥たちの大合唱と夢

今朝方、目覚めぬか目覚めないかの意識状態の中、小鳥たちの大合唱が聞こえてきた。それは静寂な辺りに清々しく響き渡っていた。澄み渡ったいくつもの高音が重なり合い、美的な音色を生み出していた。私はその音色に目を覚まされ、しばらくベッドの上でその音色に耳を傾けていた。その音色は遠い世界まで響き渡るような力を内に秘めていた。

起床後の世界はまだ闇に包まれており、これから世界が動き出すようだった。そうした中、今朝方の印象的な夢が自然と思い出された。夢の中で私は、近未来的な都市にいた。それがどこの国かは分からない。

私の隣には見知らぬ日本人の男性が一人いて、その人物がこの街の案内をしてくれていた。近未来的な都市と言っても、多くの点で現代と印象が変わることはない。しかし、しばらく街の中を歩いていると、ある時その男性がふと指を指して一言つぶやいた。

男性:「見てください。あれは今建設中の建物で、子供たちを育てる専用のものなんです」

私:「えっ、あの宙に浮いている建物ですか？」

男性:「ええそうです。あそこには全てが揃っていて、子供たちにとって全てがあの建物の中で完結するんです」

男性がそのように述べたとき、私は二つの高層ビルの間に浮かぶその不思議な建物を眺めていた。それは宙に浮かぶ未来的な小さな城のようであった。

子供たちの生活および教育があの城のような建物の中だけで完結するらしい。それを聞いたとき、果たしてそれが真の教育と言えるのかについて疑問を持った。それは子供たちを育成するというよりも、単なる人工的な培養に思えた。その宙に浮かぶ不思議な建物をしばらく眺めていると、夢の場面が変わっていった。

次の場面では、私は小中学校時代に住んでいたアパートの中にいるようだった。食卓を囲んで家族で談笑をしていた。談笑の中、父が面白い機械を持っているということなので、その機械を食卓に持ってきてくれた。見るとそれは携帯電話のような大きさの変声機だった。

この変声機が特徴的なのは、声を入力すると、出力としてその人物の幼少時代の声が出てくることだった。まずは母が試し、その次に自分が試した。この時に、なぜか父が変声機をテーブルの下から私たちの口元に向けるような役割を担っていた。そのため、父の顔が見えないまま録音が進んだ。

何かお題があった方が話しやすいだろうということだったので、私の番の時には「好きな動物」がお題に上がった。そこで私はなぜか躊躇せず、ブタを取り上げた。ブタの声真似をし、ブタの特徴についてその場で思いついたことをしばらく話し続けていた。全ての録音が終わり、各々の幼少時代の声を聞くと、なんだかその場がまた一段と和やかになった。

母と私がこの録音をしたのだが、父だけが録音をしなかったのは少しばかり不思議に思う。談笑が終わると、私はある映画館の中にいた。すでに映画のラストシーンが終わり、エンドロールが流れてくるところだった。するとそのエンドロールの中で、私が幼少時代の声で先ほど録音したブタの紹介が流れていた。

映画館が微笑みと安堵感で包まれる。そして、私の声の次に流れてきたエンドロールに私は思わず涙ぐんだ。名前の知らぬ誰かが同じように自らの幼少時代の声で語った言葉の中に、とても大切なことが含まれているように思えた。今となってはその内容を思い出すことはできないが、生きるとは何か、この人生の意味とは何かについて、大きな共感と感銘を受ける言葉であったことだけは覚えている。

そのエンドロールに思わず涙が込み上げてきて、その瞬間に目が覚めかけた。目覚めかけの時、小鳥たちの美しい大合唱が聞こえてきたのであった。フローニンゲン：2018/4/4（水）06:54

No.942: An Oscillating Wave in Budapest

The third day to stay at Budapest began. I can feel a wave-like sensation perturbing my existence. We may be destined to lead our lives, embracing such an oscillating sensation within us. Budapest, 08:39, Thursday, 4/19/2018

2368. 今日の取り組み

早朝の七時に迫ってきた頃、辺りは随分と明るくなった。今この瞬間には薄いライトブルーの空が姿を見せている。今日の午前中は晴れのようであり、午後から雨が降るようだ。今日はちょうど午後から、研究アドバイザーのミヒャエル・ツショル教授とのミーティングがあり、その時に雨と遭遇してしまうかもしれない。

今日のミーティングでは、前回のミーティングからの研究の進捗状況を報告し、その後にいくつか個別論点に話を移す。個別論点として取り上げることも今日のミーティングではそれほどなさそうであり、一つだけツショル教授と意見交換をしようと思うのは、研究対象としているMOOCの講義ではなく、学習者のオンラインフォーラム上のコメントデータをどのように加工するかということである。

すでに講義に関するデータは取得済みであり、そちらに関する分析もほとんど完了している。しかし、学習者のコメントデータに関してはまだ取得をしておらず、どこにどのようなデータがあるかだけ分かっている状態であり、これから正式にデータをまずエクセルに落としていく。どのような形でエクセルに落とし込むかを今日のミーティグで取り上げたい。これは細かな点かもしれないが、ここからデータ分析をする際に非常に重要になる。

ツショル教授とのミーティングが終われば、仮に雨が降っていたとしても中心街のスポーツショップに立ち寄り、スイミングウェアとゴーグルを購入する。これは中欧旅行の際の宿泊先のホテルのプールで泳ぐために必要であり、また今後水泳を再び生活の中に取り入れようと思っているために必要である。スポーツショップに立ち寄った後に、行きつけのチーズ屋に立ち寄り、チーズとナッツ類を購入する。来週の金曜日に中欧に向けて出発するので、それを考慮に入れた分量のチーズとナッツ類を購入しようと思う。

今日は協働プロジェクトに関する仕事もなく、午前中から自分の仕事に取り掛かることができる。午前中には、少しばかり過去の日記を編集したいと思う。昨日も過去の日記を編集していたが、この編集作業が実に多くの発見と気づきをもたらしてくれることに改めて気付き、できる限り毎日少しずつ進めたいと思うようになった。今週と来週は少し時間が取りにくいかもしれないが、なんとか時間を作りながら編集作業を進めていく。

未だ1700弱の未編集記事が残っているが、少しずつ取り掛かっていけば、いつか編集作業が全て完成しているだろう。それが積み重ねの意義であり、積み重ねることによって生み出される大きな成果だ。中欧旅行の際にも、移動中にパソコンを開けるときには過去の日記の編集を進めていきたい。普段何気なく、毎日四本程度の日記をウェブサイトに記録する形で投稿しているが、しばらくはその数を少し減らそうと思う。

© YOHEI KATO 2018

確かに、そうすることによって今度は未投稿の日記が増えてしまうかもしれないが、今は過去の日記の編集の方に時間を充てたい。早朝に少しばかり編集を行い、また午後のどこかの時間帯に編集を行っていく。今日の午前中は少しばかり日記の編集を行い、そこからは来週の木曜日に迫った「デジタルラーニングと学習環境」の試験に向けた学習を行っていく。フローニンゲン：2018/4/4（水）07:15

No.943: The Béla Bartók Memorial House

Although I suffered existential melancholy in the morning, I fully recovered from it. It might have been a tentative feeling, but I didn't expect to experience such existential depression during a trip. By virtue of visiting the Béla Bartók Memorial House, I could transcend the feeling.

This museum was excellent especially in terms of very kind staff members. I appreciate very much a female guide who answered all of my questions and told me about the details of Bartok's life. What inspired me most was that Bartok composed music for future. Since he was uniquely and innovatively integrating classical music and fork music, his work was not thought highly of at a certain period. His artistic attitude and philosophy to compose music for future animated my artistic spirit. Budapest, 14:47, Thursday, 4/19/2018

2369. バッハの優れた演奏者と作曲の新たな習慣に向けて

今日は早朝からバッハの曲をかけている。ここ最近、毎朝一人作曲家を選び、一日中その作曲家の曲を聴いているため、今日はバッハを聴き続けることになるだろう。これまではグレン・グールドの演奏ばかりを聴いていたため、他にバッハの優れた演奏者がいないかどうかを調べてみた。すると何人かの演奏者を見つけることができた。

スヴャトスラフ・リヒテル、ロザリン・テューレック、フリードリヒ・グルダ、タチアナ・ニコラーエワの演奏をまだ聞いたことがなかったので、早速彼らの演奏をSpotifyを経由してダウンロードした。今日はリヒテルが演奏する平均律クラヴィーア曲集を聴き続け、明日はまた別の演奏者のものを聴きたいと思う。

時刻は九時を迎えたが、早朝と同じようにまだ天気が良い。ここ最近は冴えない天気が続いていたが、日々の天気がどれだけ鬱蒼としていても、自分の内側にはある種の爽快さが満ち溢れている。自分の内面世界に存在する爽快さを見つめながら、今日の仕事に取り組みたいと思う。

先ほど、過去の日記を少しばかり編集していると、季節ごとに自らの思考や感覚の色や形が変化していることに気づく。ここにも、内面宇宙と外面宇宙の連動がはっきりと示されているように思った。外の世界の天気にせよ、気温にせよ、そうしたものが一つの季節を形作り、それが私の内側に影響を与えていることがよく分かる。私たちという存在が置かれた環境によって育まれるというのも非常に納得する。これはこれまでに形や角度を変えて何度も取り上げてきたことであるが、私たちの思考や感覚の深まり、そして存在の深まりはその人物と置かれた環境による相互作用によって徐々に実現されていくものなのだ。

リヒテルが演奏するバッハはとても心地よい。グールドの演奏とはまた違った良さがここにある。優れた演奏者というのは、本当に単なる機械ではないのだ。自らの思想を演奏の中に込め、自らの音を創造できるのが傑出した演奏者の一つの要件なのだと思う。そうしたことを考えると、グールドもリヒテルも、自らの音を創造したという点において、非常に偉大な演奏者だと思う。明日以降聴こうと思う、テューレック、グルダ、ニコラーエワの演奏も楽しみである。自分も自らの創造物をこの世界に形にしていきたいと思う。

昨日から、新たな曲を作るための作曲実践を就寝前ではなく、午前中か午後に行ってみて正解だったという感触がある。やはり作曲が一つの創造行為であり、抽象的な記号の操作を伴う問題解決の側面を多分に帯びているため、一日の最後にそうした活動を行うというのは賢明ではなかったように思う。

一昨日にそうした習慣を改め、午前中か午後に作曲実践に取り組むようにし、就寝前は作曲の理論書に掲載されている具体例から曲の構造的なパターンを掴むことに時間を充てるようにした。後者に関しては、作曲ソフト上に自らの手で音符を並べ、並べられた音符から奏でられる音を五感を通じて感じる中で構造的なパターンを捉えていくという実践のため、何かを新たに生み出すほどのエネルギーは必要ではない。今日もこのような形で作曲に向かい、午前午後、そして就寝前のそれらの実践を確実な習慣としたい。フローニンゲン：2018/4/4（水）09:32

No.944: A New Solution for My Research

Because I'll participate in a pipe organ concert in St. Stephen's Basilica at night, I came back to the hotel early in order to rest for a while. While I was using a jacuzzi in a pool, I came up with a new idea about my research. I remember that I was a little bit struggling with how to analyze the data sets, I found a solution all of a sudden. I can feel that I'm fully energized to continue my academic research. I look forward to working on my research again after I come back to Groningen. Budapest, 14:54, Thursday, 4/19/2018

2370. 作曲技術の発達プロセスに関する研究案

今はまだ優しい太陽がフローニンゲンの街全体を包んでおり、雨が降る様子はない。午後から行われるミヒャエル・ツショル教授とのミーティングが終わり、自宅に帰るまでになんとかこの天気がもって欲しいと思う。

午前中からスヴャトスラフ・リヒテルの演奏するバッハを聴き続ける中で仕事を進めていた。仮にこの秋から米国の大学院に所属することになれば、そこで新しい研究に着手しようと思っていることは以前にも書き留めていたように思う。これまでの研究領域とは一見すると懸け離れた領域の研究にも着手する。それは、作曲技術の発達に関する研究だ。

先ほど休憩のために手を止めた時、これから行うと思っている研究の内容とその進め方についてぼんやりと考えていた。自分自身が作曲を行っているということに加え、作曲に伴う創造の喜びを他者と共有し合いたいという思いから、この研究に取り組んでみようと思った。

先ほど考えていたのは、とりわけ研究対象領域とそのデザインに関するものだ。この研究はおそらく一連のいくつかの研究に分けて進めていくことになると思う。まずは作曲理論の理解力に関する発達プロセスを明らかにするような研究に着手する。その際に定量化基準として用いるのはカート・フィッシャーのダイナミックスキル理論かマイケル・コモンズの階層的複雑性モデルになるだろう。

作曲理論の理解力の発達プロセスを調査する際に、最初に行うべきは調査対象領域の設定である。ここでは必ず専門家の力が必要だと思う。作曲理論を構成する具体的な領域（例：ハーモニー、メ

ロディー、転調）を列挙し、それらの中から最重要なものをいくつか取り上げる形で調査を進めていく。

ひとたび調査領域が明らかになれば、次に行うのはそれらの領域の理解力を測定するための研究デザインを設計していくことだ。今のところすぐに思いつくのは、ケーススタディのような形で、実際の楽譜の抜粋を提示し、それについて調査領域ごとに一つずつの問いを用意していく。例えば、最初の問いはメロディーに関する理解力を試すもの、次の問いは転調に関する理解力を試すものというようにケース設計をしていく。ここまでの一連の流れは、これまで私が行ってきた発達測定の開発プロセスとほとんど同じである。

ただし、これまでに若干抜け漏れていた観点としては、提示するケーススタディ、つまりタスクの難易度をどれほどのものにするかということである。タスクの難易度をどのように設定していくかについては、心理統計を含め、テストの設計理論の基礎を学ぶ必要があるだろう。この点についても他の専門家に意見を求めようと思う。ここまでのデザインが完成すれば、あとは調査の対象者を決める。

理想的には作曲を学ぶ子供から高齢者までを調査対象にしたいが、最初のうちは対象を絞る必要があるだろう。自分も作曲を行っているだけに、自分がどのような回答をし、それぞれの作曲領域に対する理解度はどれほどなのかを自分でも測定してみたい。

最後に、この研究をある程度進めることができたら、次に調査をしたいのは、実際に生み出される曲の複雑性の分析とその発達プロセスである。つまり、上記の作曲理論の理解度に加えて、実際に生み出された曲の複雑性とそれがどのように発達していくのかを調査したい。これによって、自然言語と音楽言語の双方の切り口で作曲技術の発達プロセスを解明していくことができる。ここでは実際の楽曲をどのように定量化するのかということが論点になるため、ここでもまた専門家の力が必要だろう。

この調査が進めば、作曲理論の理解度と実際に生み出される曲の複雑性の度合いの相関関係などを明らかにすることもできる。上記の一連の研究に是非とも取り掛かりたいという思いで一杯である。フローニンゲン：2018/4/4（水）11:38

No.945: Micro Cosmoses to Macro Cosmos

What if our micro cosmoses unite into one harmonic macro cosmos? I think that our humanity should actualize it, and I hope that our humanity is going toward the actualization. Budapest, 17:19, Thursday, 4/19/2018

2371. ツショル教授との研究ミーティングより

先ほど小さな幸運に見舞われた。フローニンゲンで生活を営む中で良く運がいいと思うのは、大抵私がどこかから自宅に戻った直後に雨が降り始めるケースが多いことだ。今日もまさにそうだった。

午後にミヒャエル・ツショル教授とのミーティングがあり、それが終わって自宅に到着して数分後に突然雨が降り始めた。概ね天気予報通りの時間帯に雨が降り始めたが、自宅に戻ってまさか数分後に雨が降り始めるとは思っていなかった。こうしたことがこれまでにも何度もあり、そのたびに自分は運がいいと思う。今日のツショル教授とのミーティングも非常に有意義であった。特に今後の研究の方向性をより明確にする上で非常に有益であった。

ミーティングの最初に前回のミーティングからの進捗状況を共有した。その後に、ここからの研究の具体的な方向性について意見交換をした。当初の予定では、対象とするMOOCの講義に潜むフラクタル次元と学習者のオンライン上のコメントに潜むフラクタル次元との関係性を調査し、さらには講義のフラクタル次元と学習者の学習成果（クイズスコアとテストスコア）との関係性を調査するという考えだった。

これまでのところ、すでにレクチャービデオの定量化は全て終わり、後者の分析も完了させた。結果としては統計的に優位な結果が得られ、その発見事項には満足している。一方で、学習者のオンライン上のコメントを定量化するのは相当に労力を要し、データの構造上、データ分析を行う意義がどれほどあるのかについて改めて考えていた。ツショル教授とも話したが、確かに講義が内在的に持つフラクタル次元と学習者のコメントが内在的に持つフラクタル次元を比較することは面白いが、それは労力の面も考えて今回の研究では採用しない方がいいという判断を下した。

もちろん今後の研究において、そのアイデアを採用することは十分に可能だが、限られた時間の中で行う今回の研究に関しては、そこまでデータ分析の範囲を広げないことが賢明だと判断した。一方で、既存のデータ分析をより深く行っていくのはどうかという提案をツショル教授から受けた。この提案の具体的な中身を聞いてみると、非常に興味深く、時間的にもそれは十分に可能であると分かったため、次回のミーティングまでにそれらの分析を行おうと思う。備忘録を兼ねて簡単にそれらの分析について書き留めておくと、三つの定量化基準で明らかにされたそれぞれのフラクタル次元の相関係数をまず算出する。

これによって、お互いの定量化基準がどのような関係にあるのかを把握することができる。その関係性が明らかになれば、MOOCのコンテンツ開発者へのより具体的な実務的提言が可能になる。相関係数を算出した後は、それらの独立変数が従属変数である学習成果にどれほど影響を与えるのかを分析するのに際して、重回帰分析を用いる。すでにひとつひとつの独立変数が従属変数に与える影響については単回帰分析を行っていた。

しかし、そこから分析を一歩進めて、独立変数のどのような組み合わせが従属変数である学習成果をどれほど予測できるのかを重回帰分析で明らかにしたい。今月はそれらの分析を行うことに並行して、論文の執筆をより進めていく。

引き続き定量化基準と先行研究については文献調査を進め、同時にすでに執筆している論文のイントロダクションに肉付けをしていきたい。次回のミーティングまでに肉付けされたイントロダクション、リサーチクエスチョン、方法論、およびこれまでの分析で明らかになった結果を記載するセクションのドラフトを執筆したいと思う。ここからこの研究は一気に形になっていくと確信している。フローニンゲン：2018/4/4（水）18:33

No.946: Existential Burden

I experienced existential depression in the morning yesterday, which can be called “existential burden.” However, because the organ concert at the St. Stephen’s Basilica gave me sublime enlightenment, now I’m unleashed from the existential burden. Budapest, 08:59, Friday, 4/20/2018

2372. 雷の落ちる夜に

夕食後、就寝前に向けての最後の仕事に取り掛ろうとすると、突然雷が鳴り始めた。そして、先ほどからパラパラと降り始めていた雨の勢いが増した。午後に大学のキャンパスにミーティングに出かけた時は雨が降っていなかったため、今このようにして雨を眺めているのが不思議に思う。とりあえず外出中に雨に見舞われることのなかった幸運には感謝をしなければならない。

大学のキャンパスから自宅に帰る前に、街の中心にあるスポーツショップに立ち寄り、水泳用のウェアとゴーグルとキャップの一式を購入した。サンフランシスコとロサンゼルスに住んでいた頃、居住先に共有プールが備え付けられていたため、時折泳ぐことがあった。それ以降は泳ぐ機会がめっきり減り、もはや水泳をすることはないだろうと思って、ちょうど寿命を迎えた以前のウェアを処分してしまっていた。今日改めて一式を揃えたため、今後は旅先のホテルにプールがついていれば、そこでリフレッシュを兼ねて泳ぎたいと思う。

残念ながら今の居住先には共有プールが備え付けられていないので、今の生活拠点で泳ぐことはなさそうだ。今後米国か別の国で生活をするようになれば、できるだけ室内プールがついているような居住地を選びたい。そうすればより気軽に普段から泳ぐことができるだろう。

スポーツショップからの帰り道、ツショル教授と一緒に取り組んでいる今の研究のみならず、今後取り掛かる予定の新たな研究について考えを巡らせていた。それは以前の日記で書き留めたように、作曲技術の発達プロセスを調査する研究だ。この研究を遂行していくにあたって、ぜひとも実際の作曲教育に貢献するような内容にしたいと思っている。これは自分自身が作曲の実践者であるがゆえに、自分自身の作曲技術を向上させたいという思いがあり、また、これまで作曲に馴染みのない人が作曲実践を始めた際の有益な指針を作りたいという思いもある。

発達プロセスを明らかにしようとする研究は、対象領域の発達過程を支援するための具体的な実践方法や関与の仕方を提言することによって、その意義と価値がより増すように思う。とりわけ作曲というものが具体的な実践領域であるがゆえに、実践に資することのない研究を行ってもほとんど意味はなく、それは研究者の単なる自己満足に過ぎないだろう。

もちろん、そうした研究でも当該領域の科学的な発展には寄与するのだろうが、実践者でもある自分にとって、そうした研究を行う魅力はほとんどない。これは作曲に限らず、今後自分が行う研究は、実践に資するようなインプリケーションを必ず含んだものにしたい。

そのためには、実践と結びついた筋の良い仮説とリサーチクエスチョンが必要になる。科学的な研究を行う際には、兎にも角にも仮説とリサーチクエスチョンが鍵を握る。仮説とリサーチクエスチョンが研究の内容とアプローチを決定することからも、その重要性は強調してもしすぎることはないだろう。作曲技術の発達プロセスを調査する当該研究の細かな内容については、また明日にでも書き留めておこうと思う。フローニンゲン：2018/4/4（水）20:00

No.947: Purification and Perspicacity from Music Composition

Composing music pacifies my mind and make it perspicacious. I owe my continuous work to the practice of music composition. Budapest, 17:06, Friday, 4/20/2018

2373. インターンの最終ミーティング

小雨の降る早朝。今朝は五時半に起床した。起床の際に、昨日と同様に、小鳥たちの合唱が聴こえてきた。昨日に引き続き、私はまたベッドの上で小鳥たちの合唱にしばらく耳を傾けていた。心が静かに晴れ渡ってくるかのような鳴き声である。真っ暗闇の中に、清澄な小鳥たちの鳴き声だけがこだましてる。

昨日は幾分暖かかったのだが、今日はまた少しばかり寒い。今日の気温は少しばかり不思議であり、早朝の六時の気温の方が昼の気温よりも高い。ここから昼にかけて気温がじわりじわりと下がっていく。今夜は再び0度に近い気温になるようだ。幸いにして明日からはまた気温が上がり、しかも数日間連続して晴れ間が顔を覗かせるようだ。明日は久しぶりに近くのノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思う。

今日は午前中に、研究インターンの最後のミーティングがある。そのため、近くの河川敷のサイクリングロードを通って、普段は足を運ばないザーニクキャンパスまで行く必要がある。片道30分弱のウォーキングであるため、良い運動になるだろう。

今日のミーティングでは、これまで自分が行ってきたデータ分析の結果を報告する。すでに今回の調査の背景と分析結果をまとめたレポートを関係者に送っており、ミーティングではそのレポートをもとに話を進めていきたいと思う。その際に、過去に同種のミーティングを行っているため、今回は分析の細部についてあれこれと議論するよりも、フローニンゲン大学のMOOCチームがデータ分析に関して今後どのようなことを望んでいるのかを聞いておきたいと思う。

現場のニーズとして、どのような課題がそこにあり、どのようなことが科学的な分析から明らかになれば、彼らが提供するMOOCの質が向上すると考えているのかについて考えを伺おうと思う。つまり今回のミーティングは、分析プロセスや分析結果について細かな議論をするよりも、彼らが抱えている課題をここで今一度明確にするような機会としたい。

このミーティングが終われば、お世話になった関係者の方たちに挨拶回りをしようと思う。自分のオフィスを再度綺麗にし、オフィスの鍵を返却する。また、エスター・ボウマ博士から借りていたRとデータ分析に関する専門書も返却する必要がある。隣の部屋のハンスが今日も勤務していれば、最後に簡単に挨拶をしておきたい。一つ一つのことが静かに終わりを告げ、また新たなことが始まりを告げる。

人生のこうした流れと静かに寄り添いながら、今日も昨日と同じように自分の取り組みに邁進していきたい。フローニンゲン：2018/4/5（木）06:33

No.948: The Netherlands as One of My Mother Countries

I came back to the Netherlands from Central Europe. I'm on a train now, and I'm so relived to be here in this country. Interestingly enough, the Netherlands becomes one of my mother countries. All sceneries from the window on this train soothe my spirt and soul. I'm so graceful for living in this country. Amsterdam, 14:25, Saturday, 4/21/2018

2374. 音を楽しむこと

昨夜の作曲実践について少しばかり振り返っている。昨夜は、マックス・レーガーの“Modulation (2007)”をもとに、転調に伴う構造的パターンの把握に努めていた。夜に新たな曲を作るのではなく、

就寝前の時間帯は、このように作曲の構造的パターンの把握に努めるような実践をし始めたことを最近の日記に書き留めいた。昨夜の実践からも、この試みがどれほど有益であるかを強く実感した。

レーガーのこの書籍は、年末年始に日本に一時帰国した際に持参しており、移動中の空き時間に、本書に記載されている具体例の分析を一通りすべて行っていた。ただし、その時には具体例への書き込みをしただけであり、実際にそれらを作曲ソフト上に再現し、自分の耳でその音を確かめるようなことを行ったわけではなかった。そのため、昨夜から本書に記載されている具体例を作曲ソフト上で再現し、それを自分の耳で聴くということを行っていた。作曲を学ぶ上にあたって、視覚だけではなく、聴覚を用いた学習をすることがいかに有益であるかを実感する。

作曲と真剣に向き合い始めてまだ数ヶ月であり、そうした自分が楽譜を見ただけで脳内で音を正確無比に鳴らすことなどまだできはしない。こうした技術も継続的な訓練によって可能になるそうであり、それが実現されれば非常に有り難いが、そうした能力を獲得するにはまだまだ随分と時間がかかるだろう。今のような状態では、やはり一つ一つの音符を自分の手で作曲ソフト上に配置し、それを自分の耳で実際に聴くという鍛錬を積み重ねていくことが大事なのだと思う。当然かもしれないが、目で楽譜を見るだけでは分からないことが多々あり、実際に音を聴いてみて始めて気づかされることが多々ある。

学習の際にも、視覚を使うだけでは獲得されない能力があり、聴覚を用いて始めて獲得される能力があるのだ。昨夜、レーガーの書籍に記載されている具体例を再現し、その音を聴いてみると、本当に驚かされた。転調という技術の奥深さと面白さに心が大きく打たれたのである。具体例を再現しては何度も繰り返しその音を聴いている自分がいた。

転調という技術についてはこれから深く学んでいきたいと思っているが、今の理解では、転調の技術を活用することによって、曲の背景が見事に変化することに面白さを感じている。しかもそれは、微細な変化から大きな変化までグラデーションがある。喩えて言えば、転調を用いることによって、曲の世界の中で朝から夜への急激な変化を起こすことも可能であり、夜が少しずつ明けていくような微細な変化も刻むことが可能である。転調は本当に奥深い。曲の世界の背景が変わるということは、それは必然的に曲が誘引する感情の種類と質を変える。

レーガーの書籍に並行する形で、アルフレッド・マンの“The Study of Fugue (2016)”に関しても同様の実践を行っていた。こちらの書籍ではフーガの技法が取り上げられており、レーガーの書籍で行ったのと同様に、フーガの構造的パターンを把握するために作曲ソフト上に具体例を再現していった。

フーガも転調と全く同じ奥深さを持っている。この二つの書籍を用いた曲の構造的パターンの習得実践は、本当に実りの多いものだと改めて思った。これは何も心配することなく毎晩の実践になるだろう。それぐらいに、実践に伴う喜びが強い。優れた棋士が、棋譜を参考に実際の盤面に駒を並べる実践を通じて棋力を高めるのと同様に、私もこの実践をこれから毎日継続させていきたい。

とにかく膨大な構造的パターンを自分の内側に少しずつ構築していく。そうすれば、いつか自由自在に自分の思考や内的感覚を曲として表現できる日がやってくるだろう。「音を楽しむ」という音楽の真髄に触れ、その源流の中で作曲実践を進められていることに本当に感謝しなければならない。絶えず音を楽しみ、絶えず音の世界の中で日々の充実した生活を形作っていきたい。フローニンゲン：2018/4/5（木）07:01

No.949: One More Year

I determined to stay in the Netherlands one more year. It means that I can have enough time to digest and deepen what I learned in the last two years. Also, I can go on a trip to some countries where I've never been. I already plan to visit some countries this and next year. Those trips will definitely cultivate myself and enrich my soul. Amsterdam, 14:31, Saturday, 4/21/2018

2375. 博士課程での研究に向けて

七時を迎えてからようやく辺りが明るくなってきた。今日は薄っすらとした雨雲がフローニンゲンの上空を覆っている。今この瞬間は雨が止んでいるようだが、インターン先のオフィスから帰ってくる頃からちょうど雨が降り始めるようだ。風も少しばかり強く、目の前の裸の街路樹がいつもより激しく左右に揺れている。この時間帯でもすでに通勤や通学に出かける人たちの姿を通りに見かける。私もこれから一日の仕事を始めたい。

先ほど一日分のコーヒーを入れた時、再び作曲に関する研究について考えが及んだ。ここ最近の私は、本当に作曲について考えることが多く、その研究に強い情熱を注いでいるようだ。今のところ、作曲は完全に自分の趣味となっているが、趣味と学術研究を結び合わせることができたらどれほど幸せかと思う。ここで述べている学術研究というのも、仕事の意識を持って行うのではなく、自らの純粋な探究心にのみに従う形で行われる研究だ。

それを行うためには、現在の学術世界ではなかなか難しいこともあるだろうが、自分の取るべき立場を絶えず明確にし、どのような立ち位置で大学に所属するかによってそれは十分に実現可能だろう。兎にも角にも、作曲技術という個別具体的な能力領域の発達プロセスとメカニズムが知りたくなってきた。とりわけ、作曲理論に内包されている諸々の知識領域の理解力がどのようなプロセスとメカニズムで高まっていくのか、そしてそれらの理解力の高まりが具体的な作品の中にいかように発現していくのかということに強い関心がある。

もはやこのテーマを博士論文として取り上げてもいいのではないかと思い始めている。あと数か月後に、私は三つ目の修士号を取得することになる。これまであえて博士課程に進学しなかった大きな理由は、四年や五年をかけて取り組みたいと思う射程と深さを持った研究テーマになかなか出会えなかったことだろう。しかし、今この瞬間、私は作曲技術を取り上げる研究であれば、これから四年や五年の歳月をかけて取り組みたいと心の底から思う。

四年や五年ではなく、もっと時間をかけてもいいぐらいだ。作曲技術の研究を発達科学、教育科学、複雑性科学の観点から行っている人間はこの世界にほとんどいないだろう。今のところ私の知る限り、それを行っている研究者は皆無だ。そうであれば、ここに私ができる貢献があるのではないかと思う。新しい研究領域に大きく舵を切る日が近づいてきているのを感じる。それは来るべくしてやって来たのだと思う。

大学に所属しながら行う研究は、本当に自らが真に探究したいと思うことだけを探究するべきである。自分の内側の声以外の雑音には耳を傾けてはならない。純粋な探究心だけに立脚した研究を行い続けていく。それこそが自分が静かに立てた誓いだったはずである。仮に四つ目の修士課程として、音楽教育と発達科学を架橋させることのできるプログラムに進学したとしても、博士課程に進む日は刻一刻と迫っている。

それは私にとって非常に喜ばしいことである。日本企業との協働プロジェクトを今後も行いながら、それに並行して純粋な探究心に基づく作曲技術の発達現象の探究に邁進していきたい。フローニンゲン:2018/4/5(木)07:33

No.950: Succession of Legacy

While staying in Central Europe, I was wondering about what if I integrate the essential qualities of all of great composers in the past. I was fortunate to visit the Chopin museum, the List Museum, and Bartok museum. The visit encouraged me to learn their works as many as possible. They composed a number of works, which are not only precious learning materials but also my "teachers." I cannot help but imagine the progress of my music composition from here. Amsterdam, 14:38, Saturday, 4/21/2018

2376. 研究の軌道修正

少しばかり鬱蒼とした雨雲が空を覆っているが、今は雨は降っていない。今日は午前中に、研究インターンを通じて行った分析結果をジャン・ディエナム博士とエスター・ボウマ博士に報告するために、自宅から少しばかり離れたザーニクキャンパスに向かった。自宅を出発してみると、やはり今日は気温が低いことを実感した。今日からはヒートテックを着用しないことにしたが、相変わらずマフラーと手袋は必要であった。しかし、明日からは気温が上がってくるらしい。明日以降はもうマフラーも手袋も必要なくなりそうだ。

二人の博士とのミーティングは、前回と同様にとても有益な意見交換の場だった。二人はいつも多くの建設的な批判を私の研究に投げかけてくれるため、研究を前に進めていく上で非常に有益だ。一方で、時にあまりに細かな点を指摘されることもあるため、その点はあまり真剣に取り扱わないようにしている。彼らの指摘することを全て聞いていると研究が脇道に逸れてしまうことになりかねない。もちろん、細かな点の中でも非常に重要なものもあることは確かなので、その辺りの選別をしながら彼らの意見を聞くようにしている。

また、この研究に関してはミヒャエル・ツショル教授からも指導をしてもらっているため、両者の意見が時に食い違う場合に、彼らの意見を昇華させたソリューションを提示することが私に求められるこ

とがある。これは確かに高度な課題だが、それも今のところなんとかうまくいっている。ディエナム博士とボウマ博士は今回の私の研究をジャーナルに載せることを望んでいるようだ。これはとても有り難いことである。

そうした彼らの思いもあって、私への要求と期待が高いのかもしれない。今回のミーティングでは、ある意味分析レポートのような形で分析結果を紹介したが、五月の初旬に行われるミーティングでは、正式な論文の形として研究の目的から結論までを紹介したい。二人の博士とツショル教授と研究を進める際に、上記のように両者の考え方や方向性が異なる時に巧みに意思決定をしていくことが少しばかり面倒なこともあるが、彼らと協働することは研究を前に進めていく上で非常に重要な役割を担っている。

次回のミーティングまで一ヶ月ほどあるが、これから一つ最終試験があり、日本企業との協働プロジェクトがあり、さらには中欧旅行も控えているため、こちらの研究も着実に進めていきたい。これからの方向性としては、とりあえず対象とするMOOCの受講者のコメントを分析することは一旦脇に置き、講義データをより深掘りしていく方向に落ち着いた。

当初は学習者のクイズスコアとテストスコアを学習成果を測る指標に活用しようと思っていたが、テスト項目の難易度がバラバラであり、それらが比較不可能であるために、二つの指標は有益な指標ではないという結論に落ち着いた。その代わりに、学習が一つ一つのレクチャービデオを最後まで視聴したか否かの完遂率を一つの成果指標にすることにした。こちらはテスト項目の難易度のような問題が介入しておらず、完遂率間の比較が可能であるため、とりあえずはこちらの指標を用いることにした。つまり、新たにもう一度、レクタヤービデオに潜むフラクタル次元と完遂率との相関分析と回帰分析を行う必要があるということになる。

だが、すでにRのコードもあり、この分析にはそれほど時間がかからないだろう。ただしこれまでは、フローニンゲン大学が五回ほど提供したこのMOOCのうち、最新のヴァージョンの完遂率しか算出していないため、過去四回提供したコースの完遂率を算出し、それらの平均を各週の完遂率としたい。こうした処理を行うことによって、各回のコースのデータのばらつきを平準化することができるだろう。一方で、幸運なことにフラクタル次元に関しては再度計算をし直す必要がない。なぜならば、各講義のトランスクリプトは全て同じだからである。

今回の研究の中でも講義を定量化する際に大事な基準として、コースに関連した語彙という観点がある。今のところはこのコースの目的や各回の講義の目的を記述した文章から重要な概念を選定していたが、これは少し恣意的である。そのため、今回のコースが対象とする「複雑性科学」で重要な概念が何なのかをリストアップした過去の研究を探すことにした。すると、一つほど先行研究があったため、その研究でリストアップされている概念をこの定量化基準にしたいと思う。

完遂率の算出、およびコースに関連した語彙のリストアップとその基準を用いた時系列データの作成はそれほど時間がかからないだろうということを書きながら気づいた。先ほどまではこれを中欧旅行から帰ってきてから行おうと思ったが、今週末にでもすぐさまできてしまうと思う。これらを完成させてから中欧旅行に出かけたいと思う。フローニンゲン：2018/4/5（木）15:10

2377. 二つの印象的な夢

ここ数日間と同様に、今日もまた小鳥たちの鳴き声によって目覚めた。実際には、夢の印象的な場面の終わりと共に目を覚ましたのだが、目が覚めてみると、小鳥たちの歌が辺りに鳴り響いていた。

これは春の訪れなのだろうか。起床と同時に天気予報を確認してみると、確かに今日から暖かくなっていくようだ。早朝六時の今の気温は1度だが、昼間は10度を超す。明日の最高気温は20度に到達するようだ。いよいよフローニンゲンにも春がやってくるようであり、小鳥たちの鳴き声はやはりそれを伝えているのだろう。サマータイムに入ってからもうすぐ一週間となる。夜の日は随分と延び、日の出の時間も早くなっている。六時の今においても、辺りは真っ暗闇ではなく、ダークブルーに変わりつつある。

今朝方の夢は、自分の無意識の中にある攻撃性を示すような内容だった。なぜだか私はサッカーの日本代表に同行しており、そこで何らかの観点からのアドバイザーを任されていた。監督は随分と前に指揮を執った外国人の方だった。次の試合に向けて選手たちが準備をしている最中、監督が次の試合のスターティングメンバーを発表した。

そのうち五名ほどがどうやらカギを握る選手のようであり、この国際試合では事前にそれらの選手を指定選手として申請しないといけないことになっていた。一風変わったルールである。その五人の

中に、私の小中学校時代の友人が一人入っていた。この申請は、監督と当の選手が申請所に出向く形で行われる。

申請の当日、私は監督に同行し、その申請に立ち会った。今度対戦する相手は欧州のどこかの国であり、なかなかの強豪国だった。申請会場は実際に試合が行われるスタジアムであり、私は他の選手たちよりも一足先にスタジアムに足を踏み入れた。スタジアムの入り口からグラウンドに向かい、緑の芝が美しいグラウンドの上に私は立った。

そこではすでに申請用の準備がなされており、申請を行う事務員のような人物が何名かいた。ここが欧州のどこかの国のためだろうか、事務員たちも欧州出身の人間らしかった。グラウンドに到着すると、すぐさま申請が始まった。こちらの国も相手の国も、試合のカギを握る五名の選手を事前に申請する手続きを始めた。双方の国の選手が一人ずつ同時にグラウンドの中央に向かい、そこで申請を行う形式が取られていた。

四人目までの選手の申請が終わり、最後に残っていたのは私の友人だった。しかし、友人は何かの理由で遅刻をしており、最後の選手の名前が呼ばれた時にようやくグラウンドに姿を現した。友人は慌ててグラウンドの中央に向かって走り出した。しかし、せっかちなその監督は彼を申請することをやめ、四人だけ申請することを事務員に伝えようとしていた。それを割って止めるかのように友人が監督の前に出て行き、なんとか申請をしてもらうようにお願いをした。

しかし、監督は一向に取り扱うことをせず、彼の顔を見ることもなく、申請拒否を事務員に伝えた。友人は食い下がり、監督の肩を握って振り向かせようとした。その瞬間、監督が彼を思いっきり突き飛ばした。それまでその場所はグラウンドだったはずなのだが、突き飛ばされた友人は噴水の水の中に落ちた。どうやら友人はそれで怪我を負ってしまったらしかったが、それでもなお食い下がり、申請場所を離れていく監督に追いつき、もう一度肩を握ったところ、また突き飛ばされ、同じ噴水の水の中に落ちた。

今度はより重傷を負ってしまい、もはや試合に出られるような状況ではなかった。その光景を見ていた私は、監督の度が過ぎた行動に対して反感を持ち、その場ですぐに監督に何かを言おうとした。

© YOHEI KATO 2018

だがそれよりも先に、友人の手当が先だと思い、友人の方に駆けつけた。額が切れ、両足の指からかなりの出血がある。これでは当日の試合に出ることは不可能である。

私たちは宿舎に戻り、友人の治療をすぐさま行ってもらうように医務員にお願いをした。その日の夕食時、監督の暴挙が他の選手にも知れ渡り、ディナーの席で一人の若い選手が監督に殴りかかった。その選手は、監督のみならず、通訳を務めている外人にも襲いかかっていた。私はその現場の近くの席にいたが、それを止めることをせず、むしろそれは起こってしかるべきことだと思い、その場を静観していた。

いやむしろ、その若い選手の行動は自分が取ろうとしていた行動と全く同じであったため、彼の行動を応援している自分がいた。その騒動はしばらく続き、その若手選手は日本に帰国されることに決まったところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面は全く暴力的なものではなかった。私は薄暗い建物の一階にいて、そこから目的地の分からない場所にこれから向かっていくようだった。ふと自分の足元を見ると、靴を履いていないことに気づいた。自分の靴がどこにあるのかを思い出そうとしたところ、ちょうど建物の入り口で脱いでいたことを思い出した。

すぐさま入り口に向かってみると、自分が置いていた場所に靴がない。すると一人の小さな男の子が私に近寄ってきて、靴を差し出してくれた。どうやら私が置いていた場所は靴置き場ではなく、その男の子が正式な場所に置いておいてくれたようだった。私はその男の子にお礼を述べると、彼は満面の笑みを浮かべながら身振り手振りを交えて何かをつぶやいた。

私にはその子のつぶやきが聞き取れず、今何と言ったのかその子に聞き返した。すると、また同じく非常に聞き取りづらいつぶやきが返ってきた。その時、私の横にいた女性が私に声をかけてきた。

女性:「その子は言葉が喋れないんです」

私:「そうなのですね・・・」

男の子は相変わらず満面の笑みを浮かべながら私に何かを伝えようとしている。彼が喋れないということが分かり、彼が何を伝えようとしているのかをより一層理解しようとした。

私:「Bird?」

私は彼の身振り手振りから、それは鳥を表現しているのではないかと思った。私が“bird”という単語をつぶやくと、その音の振動が男の子に伝わったのか、彼はさらに嬉しそうな笑顔を浮かべ、頷くような素振りを見せた。どうやらその子は鳥を表現したかったようなのだ。それが分かった瞬間に、また夢の場面が変わった。

今朝方はそのような夢を見た。どちらの夢もとても興味深い。前者の夢を見たのがなぜなのかも、昨日の自分の状態からしてみればよく理解ができる。二つ目の夢で男の子が表現していたのは鳥だということが分かったが、その子は鳥を表現することを通じて本当は何を私に伝えようとしていたのだろうか。表現の背後にある本当の意図を私はまだ汲み取っていない。

遠くの空が薄紫色に変化している。清澄な小鳥の鳴き声がまた辺りに響き始めた。フローニンゲン:2018/4/6(金)06:55

2378. 研究と自己に伴う揺れ

今日は風がなく、とても穏やかな一日になりそうだ。目の前に見える赤レンガの家の煙突から白い煙がゆっくりと上空に立ち昇っている。今朝のフローニンゲンの空は本当に綺麗だ。遠くの空は薄紫色に照らされていて、手前の空はライトブルーの様相を呈している。

今日は久しぶりにノーダープラントソン公園へランニングに出かけようと思ったが、昨日一時間ほど歩いたのと、今日は少しばかり時間をかけて取り掛かりたいことがあるため、今日は自宅でトレーニングをすることに留めようと思う。来週は天気が良い日が続くようなので、また来週にランニングに出かけたい。

昨日は、ザーニクキャンパスに出かけ、そこで現在行っている研究に関するミーティングを行った。この研究はミヒャエル・ツショル教授と主に進めているものだが、研究対象がMOOCということもあり、

またフローニンゲン大学のMOOCチームからデータを提供してもらっているということもあり、研究インターンでお世話になった二人の博士からも引き続き助言をいただいている。昨日のミーティングはまさにその二人と行ったものだ。ミーティングが終わり、再び研究に取り掛かりたいという意思が強くなり、指摘されたいくつかの事柄に対して、早速修正を加えるようにした。

具体的に手を動かして分析を行ったり、文章を執筆したというよりも、修正案をあれこれと考え、それをメモとしてまとめていたと言った方が正確だろう。明日は研究に充てる時間が幾分取れると思うので、これらの修正案は明日に実行したいと思う。

昨日のミーティングを改めて振り返ってみると、研究というのは小さな揺れが不可避につきまとうものなのだと思う。もちろん、時には大きな揺れが起こることもあるだろうが、こうした揺れの幅は何によって決まるのかを考えていた。最初に立てたリサーチクエスチョンや仮設の強さによって決まるのだろうか。もしかすると、今回の研究はその辺りの強度がきちんと確保されていなかったために、諸々の揺れが起こったのではないかと思われる。

ただし、昨年サスキア・クネン先生と行っていた研究の方がより大きな揺れがあったように思う。研究の途中で新たな分析手法を加え、結局それを活用しないというプロセスを辿っていたことからも、昨年の方が研究に紆余曲折があったように思う。そこから自己に観察の視点を移してみると、研究そのものの揺れのみならず、私の内側も揺れを経験しているから興味深い。研究の揺れに応じて自己が揺れ、自己の揺れに応じて研究に揺れが生じる。

研究も自己も生命を持つダイナミックシステムであるから、揺れそのものは何ら否定的なことではない。むしろ、そうした揺れがあるから前に進めるのだ。ここで重要になるのは、その揺れの変動性の度合いである。どうやら研究や自己が前に進むための最適な変動性というものがありそうだという感覚がどんどん増してくる。

今回の研究で経験している揺れは突発的に訪れたものであり、もしかすると研究を前に進める上ではあまり必要のない揺れなのかもしれないと思う。それは上述の通り、リサーチクエスチョンと仮設の強度によって本来生じなかった揺れが含まれているからだ。一方で、こうした研究を発展させていく

上ではあまり必要でなかった揺れも、自己を成熟させていくためには必要であったことに気づかされる。実際に、私は昨日のミーティングを通じて様々なことを学ばされた。

今後の研究においても、自己の成熟に必要な揺れを経験し続けるだろう。そうした経験が積み重なるに連れて、研究そのものへの不適切な揺れは減少し、研究がより最適な揺れの伴うものになるのではないかと期待している。これから今日の仕事にゆっくりと取り掛かろうと思う。フローニンゲン：2018/4/6（金）07:20

2379. 春の入り口から

早朝から相変わらず小鳥の優しく美しい鳴き声が聞こえて来る。フローニンゲンも少しずつ春らしくなってきた。数週間前にも一度春らしさを感じることはあったが、それは冬と春の最後の狭間の時期であり、結局あの時はまた冬の気候に逆戻りした。

だが、季節はそれを乗り越え、いよいよ春に向かって確かな躍動を始めている。もうこれが春の入り口なのだと疑わない自分がいる。窓の外から小鳥の鳴き声が聞こえ、書斎の中には昨日に引き続きバッハの平均律クラヴィーア曲集が鳴り渡っている。どうやら私はスヴャトスラフ・リヒテルの演奏するバッハに魅了されているようだ。生命の静かな情熱を感じさせてくれる春のこの陽気、小鳥の鳴き声、バッハの音楽があれば、私は今日もまた前に一歩進めるような気がする。

今日は午前中に、協働執筆の話をいただいている書籍の原稿を読んでいた。その内容にとても感銘を受け、これから本格的に関与させていただきたいと思った。私は今のところ単著を執筆する気はない。しかし共著であれば、人と組織の成長に関する書籍を今後も世に送り届けていきたいと思う。

今はまさに二つの領域の異なる出版企画に関与させていただき、まだ具体的に動き始めていないがもう二つ出版企画がある。できれば今年か来年の初旬をめどにそれらの四冊を世に送り届けることができたらと思う。とにかく様々な方たちとの協働を通じてこの世界に関与していくことと、徹頭徹尾一人で進めるライフワークを進めていくことに従事し続けたい。後者の日記の執筆と作曲も、実質的には他者の隠れた関与が常にあることを忘れてはならない。日記も曲もこの世界における他者との交流によって生み出されているものなのだから。

今日は昼食後すぐに、一件ほどオンラインミーティングがある。そこでの対話も必ずやこの社会への具体的な関与として形になっていくだろう。そしてその過程の中で経験した事柄が、自分の日記や曲の中に顕現されていくだろう。全てがそのように回っていくことを、私はとても喜んでいる。この生活のあり方を継続させていくこと。そしてそれを規律と克己の中で実現していくことを改めて誓う。

今日は昼食前に、中欧旅行の前日に行われる「デジタルラーニングと学習環境」の最終試験に向けた学習を行う。昼食後のミーティングから夕方にかけてもこの学習を行っていく。ここからは少しばかり学習の密度を濃くしてより集中的に学習を進めていく。この試験は、私がフローニンゲン大学で受ける最後の試験だ。

そうしたこともあり、最後の集大成ではないが、これまで通り抜かりなく学習を進めたいと思う。今日具体的に行うこととして、コースを担当するミヒャエル・ツショル教授がすでにサンプル問題を共有してくださっているので、それらの問題に全て回答する。以前にその雰囲気を掴んでいたのだが、今日は本格的に自分の言葉として回答を綴る。私はコンピュター上で英文を執筆していくことは慣れているのだが、手書きで英文を書いていくことは不慣れである。

今回の試験はコンピュターベースではなく、古典的な筆記試験である。確かに、普段のメモは英語で書いているために、日本語を手書きで書くよりも英語を手書きで書くことの方が慣れていると言えばそうなのだが、コンピュターベースの方が圧倒的に回答しやすい。ただし、ツショル教授がクラスの中でも述べていたが、「とにかく回答は短く簡潔に」と強調していたので、その点は朗報だ。この試験を無事に終え、いよいよ中欧に足を運ぶことを今から楽しみにしている。フローニンゲン：2018/4/6（金）11:08

No.951: An Ending and A New Beginning

I came back from Central Europe to Groningen yesterday. I felt that a journey ended, and I noticed that it meant a new start. An ending is a new beginning. Groningen, 09:55, Sunday, 4/22/2018

2380. 感動と内面の成熟

たった今、毎日の日課である午後の仮眠を終えた。仮眠の前にオンラインミーティングがあったためか、頭が非常に冴えており、今日の20分間の仮眠はほぼグロス意識にあった。しかし、仮眠から目覚めるか否かの最後の瞬間にはサトル意識にあったように思う。というのも、そこではサトル意識に固有の豊かな心象イメージが立ち現れていたからである。

また、不思議なことに、私はとても低いドレミファソラシドの音階の進行を聴いていた。それは確かに低い音だったが、不気味な音の進行ではなく、原初的な音の深さを伴うような世界がそこに広がっていたように思う。米国に渡って人間の意識について探究を始めたことをきっかけに、そして三年前に日本に一時帰国していた際にエネルギーワークの実践を始めたことをきっかけに、日々の生活の中でより深い意識状態にアクセスすることが可能になった自分を見る。

それにしても今日はなんと素晴らしい天気だろうか。早朝からずっと晴れ間が広がっており、この天気は明日以降もしばらく続くそうだ。小鳥たちの存在には本当に感謝をしなければならない。彼らはまだ早朝と同じように近くで美しい歌声を奏で続けている。

もちろん、時折休憩を挟むが、彼らは常に自分の身近なところにいて、こんなにも美しい声をこちらに届けてくれる。それに応えようとしない人間はいるだろうか。仮にそれに応えられないようであれば、自己を超えた存在からの促しに応えられるはずもない。さらには、人生から投げかけられた問いに応えていくということもできないに違いない。

先ほどのオンラインミーティングの中で、感動と発達現象に関する興味深い話題が取り上げられた。人は歳を重ねるごとに感動しやすくなるという。確かに、それは一理あるだろう。しかし、ここで私たちが見逃してはならないのは、単に歳を重ねたから日々の出来事に感動しやすくなったのではなく、そこには内面の確かな成熟があると思うのだ。私たちは内面が成熟するにつれて、この世界の諸々の現象や出来事から豊かな意味を汲み取ることが可能になる。

内面が成熟し、汲み取ることのできる意味が豊かなものになればなるだけ、それが一つの重層的な意味の物語になる。私たちは意味を構築する（meaning-making）生き物であるのと同時に、物語を構築する（story-making）生き物だ。

内面の成長とはつまるところ、この世界から汲み取る物語が深まる過程に他ならず、構築する心の物語がより豊かになることを意味するのだろう。内面の健全な成熟過程とはまさに、この世界から汲み取る意味と物語が深まることを意味しており、私たちの内面が豊かになればなるほどに、この世界から汲み取る意味と物語により深い感動の念を覚えるのは当然ではないかと思う。

この世界を透徹した眼差しで見つめる中で、仮に悲惨な意味と物語がそこに存在しているのであれば、それに積極的に関与しよう。そうした意味や物語を生み出したのは私たち人間に他ならず、それらの意味と物語を新たなものに書き換えていくことができるのも私たち人間なのだから。フローニンゲン：2018/4/6（金）14:46

No.952:Reminiscence of Central Europe

My memories about the trip to Central Europe are coming back silently. One merciful aspect of the trip showed up all of a sudden. That trip included not only flamboyant facets but also pious aspects. Groningen, 10:21, Sunday, 4/22/2018